

食物学会誌50号に寄せて

調理学科目・教授 口羽 章子

今年は、戦後50年という節目の年でした。この歴史の大転換期を回想して過去の反省すべき問題が種々提起され、歳月という距離が、当時の我が国の行為を冷静な目で客視的に判断する機会を与えたこと、新しい一步を踏み出すために、それが如何に大切なことであるかも知りました。

同じ年、私は食物学会誌が、50号発刊という記念すべき年であることを編集責任者の成田先生から教えられ、正直驚きました。実は、学会誌発刊から今日までの40年近い歳月は、自身の半生と重なるだけに、私はつい情緒的な思いにかられることになりました。

発刊号に寄せた黒川教授（故人）の巻頭言は、当時の先生を想起するのに充分で、家政学原論学者として一方の旗頭であると自他共に認めておられた先生の、面目躍如たる有様が彷彿と浮びます。

ふり返えれば、当時の食物学科は、昭和24年の学制改革によって発足した新制大学として誕生した学科でありました。現在の家政学共通専門科目である家政学原論担当の黒川教授が初代食物学会長であられたことも不思議な気がします。私は先生のレポートに「家政とは家庭生活の営み、学は科学の意味であり、生活の営みを科学的に研究する学問が家政学である」と書いたことがありました。これに対して先生は「家政学がはたして一つの学問であるか否かについてその理念と哲学を通じ、学問大系を明らかにするのが家政学原論であり、家政を学ぶことが日常家事技術を主軸にしたものであってはならない」と、科学と書いた私のレポートを家事技術と置き換えて、卒業研究にあけくれているただの学生にまで論戦をいどまれた一徹な教授でもありました。その後食物学科は、昭和28年に他大学より一足早く栄養士の養成機関として認可され、現在のカリキュラムに近い4ブロック体制が漸次構築されはじめ、各専門分野の教授を迎えることができました。家政学の哲学的体系の充実を望まれた黒川教授の考えとは裏腹に、また一方では先生の願望でもあった家事技術的色彩が払拭され、科学的な実践学としての体制が整うことになった訳です。

一方本学の食物学会誌が、50号の今日まで女子大学の紀要レベル以上の専門性の高い著述によって構成され、同時に本学食物学科の学問レベルを維持することが可能になっ

たその原動力には、無から研究体制の確立のため努力された先輩諸先生方の盡力を忘れることはできません。そのことが、優秀な先生方を迎え且つ今日の食物学科の研究・教育レベルの向上に大きく寄与したと思うからです。何時の間にか50号に寄せて、来し方を語ることになりました。

今後もこの多様な社会変化の中において、生活科学という学問が魅力的かつ社会的有効性を感じさせる重要な研究分野として発展し、本誌がそれをリードしていってくれることを期待して、食物学会誌に私はエールを送りたいと思います。